

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」(6770m未踏)偵察行 その10

クチャ(庫車)・・・久根さんと同衾!



サヤ(沙雅)県を過ぎ、行政区ではクチャ(庫車)県にはいった16:00ごろ、車窓を眺めているとロバ車が目につくようになった。みんな向かっている先は同じようだ。セマン(斉満)という町のバザールだという。地元の人ほとんどがロバ車だが、我々のような通りゆく車も集中。すべてが町のメインストリートに集中して大変な賑わいだ。やはりウイグル族はバザール好きだ。色とりどりのアティリスに身を包んだ女性たち、スイカ売りの屋台、ロバのいななきに車のクラクション、大声で値段交渉をする人々。衣食住にかかわる全てのものが所狭しと並べられて売られている。西域情緒たっぷりである。クチャ市街まではもう25kmである。

17:00クチャに到着。遅い昼食を食べ、庫車賓館へ行くと今日は満員で泊まれないという。そこで、すぐ近くにあった長福宮酒店というところに飛び込むと、5人1部屋でいいならスイートルームが空いているとのこと。早速スイートルームに入ると、中には仕切られた3部屋があり、トイレも二つ。ただしベッドはダブルベッドが一つだけ。ヌルさんからは、大西さんと久根さんはここで寝てくださいと寝室をあてがわれた。えっ?



久根さんと同衾、と思ったが、昨日のテントのことを考えれば、何の問題もない。なかなかお目にかかれない部屋で一夜を過ごすことになった。クチャの町は私にとっては初体験。21:00ごろ屋台に繰り出した。町の中心部にある大きなショッピングセンターの前の広い歩道が夜は屋台街へと早変わり。中国の人は本当に屋台が好きだ。今日食べた珍しい料理は牛蹄子。冷製で牛の足とピーマンを使った料理である。結構プリプリしたコラーゲンたっぷりの料理。例のペンギン生ビールにお決まりのシシカバブ、茹でピーナッツ、その他何品かの屋台料理、最後はちょうどいい塩味のウイグル風すいとんで締めた。旅も終盤、最後は完全に観光旅行モード。

不法侵入で罰金

8月5日 ルームチャージしただけなので、朝食は2人分だけついているという。そこで朝食は漢族2人に譲り、我々は本来なら高所で食べるはずだった食材を片付けることにした。僕の場合、ウイグルにいと、何を食べても美味しいので、日本食が恋しくなるという場面はあまりない。しかし、久しぶりに食べたカレーチャーハンと卵スープは、アルファ米やフリーズドライではあったが、懐かしい味だった。ヌルさんからは、「今日はスバシ古城、クズルガハ烽火台、クズルガハ千仏洞、クチャ大寺、バザールの順でクチャの見所を全部見学しちゃいましょう。」という提案があった。「クチャといえ、キジル千仏洞やクムトラ千仏洞が有名ですよ。」とさりげなくそちらへの見学希望

を匂わせた僕に対し、ヌルさんは「洪水でキジルやクムトラへの道は壊れていていけません。」とつれない一言。またここでも洪水か。南でも北でも、今回はことごとく洪水の影響を被っている。



スバシ古城はいにしへの亀茲国の遺跡である。仏教国であったが故、629年天竺に行く玄奘三蔵も、ここに立ち寄った。遺跡の中でも一際目立つ赤茶けた土の城を中心にした一画が、玄奘が立ち寄り「大唐西域記」にも名を記した唐代に最も繁栄をした昭怙釐寺だという。往時は多くの僧侶が行き交い、その下には多くの市が立っていたことだろう。今僕が立っている場所は西寺区であるが、眼下には

クチャ川が流れ、川をはさんで東寺区の遺跡が遠望される。クチャ川の上流でもこの夏大洪水が発生し、1000人近い人が孤立したそうだ。スバシとは「水の上流」を意味するウイグル語。ムスターグアタに向かう途中のスバシ峠も同じ意味なのだから、沙漠における「水」の重要性を感じさせるネーミングだ。しかし、今年はその命をつなぐ水が、多くの場所で災いをもたらした。自然は恩恵を与えてくれるが、時に我々を戒めてくれる。いにしへの廢墟の上で、そんな感慨を抱いた。

続いて訪れたのは、期せずしてクズルガハ千仏洞だった。クズルガハ烽火台を目指した我々は、スバシ古城から一本道を間違えてしまった。秦さんとヌルさんの勘により、道路から外れて、道のない沙漠の中を、クズルガハ烽火台を目指した。沙漠のダートに行くが、小さな丘や水流のあとのえぐれた箇所などに阻まれ、先も見えず現在地が分からなくなってしまった。小高い丘に登って見ると、高台に聳えるクズルガハ烽火台がわかったが、そこまで行くにはかなり迂回しなければならない。だいたいの見当をつけたうえで、道なき道を進んでいく。で、突然目の前が開けた場所がなんと、クズルガハ千仏洞だった。断崖に洞窟を掘り、そこに仏像が安置されている。往時の亀茲国は強大な仏教国であり、この近辺にはこういった遺跡がいくつもある。ここは普段は一般には開放していないため、中を見るには手続きが必要だそうだ。その手続きをするために、烽火台まで行こうと車を進めた。

烽火台は高さが13m、漢の宣帝時代の遺跡である。小高い丘の上であってひときわ目立つ。じっくりと見学した久根さんと僕が車のところに戻ると、ヌル、周、秦の3人の中国人が困ったような顔で相談している。「大西さん、私たちは罰金を払わなければなりません。」というのだ。気がつく、我々が来た道とは反対側に大きなゲートが見え、そちらが入場口、我々は裏口からの不法侵入だというのである。周さんが双眼鏡を取り出して、その建物をじっと見ていると、我々の存在を認めたスタッフがすごい勢いで車を飛ばしてやってきた。かなりの勢いでまくしたてるスタッフに、ヌルさんと周さんが説明をするがなかなか話はつかないようだ。どんな顛末になるのだろうかと思守る我々・・・やがて話がついたのだろう。ヌルさんがスタッフの肩を抱きながら、100元札を1枚握らせた。急に笑顔になったスタッフとヌルさんの間でその後も何事かやりとりがあったが、スタッフはまた猛烈なスピードで車を飛ばして戻っていった。100元の「袖の下」、中国は変わっていない。結局この一件があったので、クズルガハ千仏洞の見学は中止した。しかし、ヌルさんは転んでもただでは起きない。洪水で通行止めになっていたキジル千仏洞への道が開通したという情報を先のスタッフから得たというのだ。思わずにんまり。